

ひそかに 読まれている本

『フューチャー・イズ・ワイルド』
ドゥーガル・ディクソン&ジョン・アダムス
松井孝典監修 土屋晶子訳
(ダイヤモンド社 2400円+税)
Tel.03-5778-7240



2億年後の地球は もっとワイルドになっている

平尾隆弘 (編集者)

本書を読むとなぜかワクワクしてくる。

「驚異の進化を遂げた2億年後の生命世界」と副題にあるように、『フューチャー・イズ・ワイルド』には、500万年後、1億年後、そして2億年後の地球が描かれている。豊富なカラー図版で、奇妙奇天烈な生物が次々に登場するのである。

著者の1人ドゥーガル・ディクソンは、20年以上前(1982年5月)、『アフターマン』(旺文社)を刊行した。舞台は5000万年後。人類はとうに滅亡し、ネコ科だがサルのように手足でものをつかむ「ストライガー」や、水陸両棲の霊長類で水に入るとカエルそっくりに泳ぎまわる「スウミング・モンキー」などが活躍している。当時4000円で購入した大判図鑑は、いまでも私の愛蔵書である。でも『フューチャー・イズ・ワイルド』はさらにスケールが大きく、図版もリアルで楽しめる。いわば『アフターマン』の進化形なのだ。

2億年後の地球を見てみよう。まず数千年後、氷河期のピークがきて人類は絶滅。1億年後、今度は火山活動の活性化によってあらゆる生物は死にたえる。2億年後、大陸は移動し、1つになった超大陸(第2パンゲア)が生まれる。大陸が1つだから、それをとり囲む海も1つ(地球海)だ。

地球海上空を群れをなして舞っているのは「オーシャン・フリッシュ」である。本書カバーに描かれた魚のオバケのような生物で、カモメほどの大きさ。祖先はタラ科の魚だが、胸びれが翼に進化し、1秒間に8回はばたくという。

「海鳥から進化したクジラ並みの巨大ペンギン」「地下社会でコロニーを営むウズラの末裔」「4匹ひと組で鳥を襲う極彩色の甲虫」「4枚の羽で標高1万メートルを滑空するツルの子孫」……「へえ～、へえ～」と驚くうちに、本書の圧巻「メガスクイド」が出現する。重さ8トン、2億年後の地球をのし歩く最大の陸生動物。先祖は頭足類、つまりイカだというのである。骨はないかわりに筋繊維が発達し、8本足で移動する。イカの足は10本のはずだがと思いきや、残りの2本は「触腕」と化し、2メートル先まで伸びて果物、若葉、樹上に住む生物などをエサにする。額にあたる部分からは鳴き声を発する。「激しく雨が降るなか、メガスクイドはうなるような大きな声を出しながら、この一帯は自分のなわばりだと宣言してまわっているのである」(p.270)

このあたりでアホらしくなるひとがいるかもしれないが、著者たちは真剣だ。生物学、地質学、気候学、生態学など専門家からなる国際チームと連携し、可能なかぎり科学的正確さを期したという。

かつて『ワンダフル・ライフ』(ハヤカワ文庫)で、想像を絶するような形態の生物(カンブリア紀に実在し絶滅したバージェス動物)を紹介したS.J. グールドは、「専門家にも、興味をもった素人にも同じように読めて、しかもどちらをも満足させる科学書」を書きたいといっていた。『フューチャー・イズ・ワイルド』は、まさにそうした1冊だと思う。

